
atonement

ぱろっともん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

atonement

【Nコード】

N4572BA

【作者名】

ぱろっともん

【あらすじ】

青年天見翔あまみしやうは人を殺した後悔から自殺する。しかし天国にも地獄にも逝かず何故かデジタルワールドへ行ってしまふ、彼はデジモンと出会いどう変わるのか。

第一話 自殺（前書き）

第一話です。ダメ人間が書いています。読んでくださったら幸いです。

第一話 自殺

プロローグ

足が地面から離れた。

伸ばした手は空を掻いて。

自分の体が墜ちていった。

自分に向けて叫んでいる声が聞こえる
泣き叫んでいるのが見える

その声も聞こえなくなった。
その姿も見えなくなった。

何も 何も 自分の伸ばした手すらも 見えなくなった。
何も 何も 自分の叫び声すらも 聞こえなくなった。
何も 何も 何もかもがなくなった 全て
を否定された
存在ですらも

私の名前は天見あまみ翔しゅう今から私は命を絶とうと思う。平たく言えば自殺しようとしている人に迷惑をかけたくないので、遺書よりわかりやすいようにこの映像を撮っています。

これは私の意思です、私は人を殺しました。正確には殺したも同然といった方が良くもしいれない。私の目の前で彼は崖から墜ちていった。私は助けられなかった。山に行くきつかけを作ったのも私、その崖道を通るように決めたのも私。私はその罪を償いたい。

彼、天見翔はカメラを停めた。

そして机の上においた大量の睡眠薬を少しずつ飲み込んだ。彼はとてつもない眠気に襲われながら布団に入った。

彼の意識は闇の中に消えた。

その直前になって激しく後悔した。

死ぬ瞬間1が0に変わる瞬間彼は《生きたい》と切に願った

しかし意識は闇の中に

第一話 自殺（後書き）

かなり更新遅くなると思いますが、
不定期に更新するつもりです。

第二話二つの世界（前書き）

第一話があまりに短くてすみません。今回はデジモン出ます。

第二話 二つの世界

私、天見翔は間違い無く死んだはずだった、

しかし感覚があるし意識もある、

暖かいものが上に乗っているのがわかる、跳ねているのもわかる。

「
」

天国だろうか？

「
」

しかし私は人殺しだから天国にはいけないはずだ。

「
ヨウ」

だとするとここは、いったいどこなのだろう？地獄とは思えない、鳥のさえずりも聞こえる。天国でも地獄でもないならここは

「とつとと起きんか？」

殴られて思考は中断された、さっきまでとは違う声だ

「いつまで寝とるんじゃ？」

「殴りたいのか」

もうすでに殴られている。

「シヨウー!!」

名前を呼ばれて初めて目を開けて振り向いて

そこには小さなピンク色のタコの上に青色の南米辺りに咲いてそうな花が咲いている、目は緑色でとても澄んでいる、さらには嘴らしきものまである謎の生き物がいた。

少なくとも地球上の生き物ではないだろうそう判断するのに些かの躊躇もなかった。

嫌な予感がしたので自分を殴っただろうものの方を見ると

こちらも中々に珍妙といってよい人(?)がいた。

素足で目も口も鼻すらも見えないほどの白髪と白髭をたくわえボロボロの服を着て足にまで毛を生やし猫の手のような杖を持った人(?)がいた。

とりあえず敵意はなさそうなので(殴られたけど)疑問を口に出してみた「ここはどこで、あなた方は何者なのですか?」

「名を聞くなり自分から名乗らんかあ?」怒られた。

さつきからシヨウと読んでいたから知ってるかと思っていた。

「私の名前　「オレはジジモン」割り込まれた、しかも一人称オレって」　　ここはデジタルワールド、こいつはピョコモンじゃ」「

でじたるわーるど？彼らの名前も大概変だがそれよりも気になる事だどうやら地球上ではないのは間違いないらしい。

その様子を察したのだろうピョコモモンが口を開いた。「デジタルワールドはボクたちデジモンの世界だよ」

でじもん？

「 デジモンはデジタルモンスターのことで 」

でじたるもんすたー？電子的な怪物？

「 ボクはシヨウのパートナーなんだ 」

パートナー？ 相棒？知り合って間もないのに？

ジジモンが口をはさんできた「オレが説明しよう、まずここはお前の住んでいた世界ではない」「それは大方わかっている。」「お前たちの世界はリアルワールドと呼ばれる」「りあるわーるど？ 現実世界？」「ここは0と1の狭間にある世界だ。そしてパートナーとは一部のデジモンだけが持っているものでパートナーを持つデジモンにはあらかじめパートナーのデータが刻み込まれている。わかったか？」

整理して考えてみることにした

「0と1の狭間」「0と1というのはプログラム言語のことだろうか、となるとデジタルワールドはパソコン等の電化製品のネットワーク上にあることになる。だとするとピョコモモンやジジモンは何らかの実行プログラムで「データが刻み込まれている」とはピョコモモンと

いうプログラムを構成するデータに天見 翔というデータの一部が情報として組み込まれていると見て良いだろう。

この推論から導き出される答え もとの世界に戻るには彼らの協力が必要だろう。(できないかもしれないが)、そして ピョコモンには自分が必要なだろうということ。

つまり

彼らと手を組む以外の手はない。

「・・・私は天見 翔です。よろしく願いします。」

「なかなか聡いじゃないか、一つ言ってお前をリアルワールドに戻す方法はないぞ」「予想どおりだ」「今お前がここにいるのはオレが呼んだからじゃ」「ならば戻る可能性は0ではないだろう」「何故呼んだかと言えば、世界を救うためじゃ!」「そんな急にいわれてもどうすればいいんだよ まあ協力以外に無いのだが」「まあ具体的に何をしてもらうかと言えば 旅に出てもらおう。具体的にどんな危機に瀕しているかはわからない!」

・・・は?呼びつけといてわからないとは、

「よし、シヨウ行こう!」

ピョコモンは何故納得できるのか?ワケがワカラナイ。

しかし行くしかないリアルワールドになるべく早めに戻りたい。

「じゃあ・・・行きましようか。」

その刹那、地中から黄色い亀？が飛び出たのは認識した。その直後、体が中に浮くのを感じた。

ドサツ　鈍い音ともに着地した。

しかし黄色い亀　妙に首が長いのと棘だらけの甲羅が気になるが
はもちろん待つてはくれなくて、大口を開けて迫っていた。

先程後ろにいたピヨコモンは黄色い亀の眼前にいる。

立ちふさがっているのがわかる。でもそこに居たら食われるかもし
れないのにわからない　パートナーとやらだからだろうか？

立ちふさがっているピヨコモンの体が光だした。黄色い亀が心なし
か怯んだような気がする。

「ピヨコモン進化、ピヨモン！」

光に包まれたあと出てきたのは、ピンク色の体に蒼い目、羽の先には爪のようなものがあり、頭にはクルリと丸まった青とピンクの何か、一言で表すならばピンク色の鳥といった感じだった。

「マジカルファイヤー！」

その嘴から緑色の炎が渦を巻いて吐き出される。少し声と炎を同時に出せるのを疑問に思ったが、そういうものなのだろうと思うことにした。

黄色い亀、のどがった甲羅に当たりはしたが焦げるわけでも黄色い亀が炎に包まれるわけでもなく、黄色い亀は怯みさえせずピヨモン

を噛み砕こうと

「があああああああああ

ザクッ

ぶちゅっぶちゅ

嫌な音が支配して

気がついたら

自分の右腕の肉が削げてて

血が体を汚して

血が温かくて、

ピヨモンの蒼い目が怯えていた。

ピヨモンの口が動いて

「うあああああ

例えばようもない痛みが襲ってきた。

しかし現状が打破されたわけではないから

逃げる策を考えなければならなかった。

持っているのは睡眠薬の粉二袋、突飛ばした時に着いたのだからピヨモンの羽、靴だけだった。

これらの材料から逃げる策を考えなければならない

第二話二つの世界（後書き）

m 一話で自殺で二話で大怪我、いじめたい訳じゃないんですm（――）

第3話 奇策と力 (前書き)

今回はピヨコモンがピヨモンになった理由がわかります。

第3話 奇策と力

私、天見 翔は今危機に瀕している。黄色い棘だらけの甲羅をもつ全長5メートルぐらい高さ2メートル近い亀(?)に腕の肉を削がれた。

しかも特に作戦というわけでもない。

また激痛からか恐怖からかわからないがからだは動かない。

黄色い亀がそんな格好の餌を逃がすわけがなく、左の前足で殴ってきた。

ミシイ ボキバキツ

不快な音がして体は2メートルほど飛ばされ、頭を打ち着けた。

ガスッ

一瞬意識を失ったが、右腕に走った激痛のおかげで覚醒した。

しかし2メートルという距離はあまりに短い、しかし致命傷を避けるには十分で

黄色い亀も一撃では仕留められないとわかっているのだろう、一撃で仕留めないと彼らに逃げられることも

今、

翔が持っているものは睡眠薬の粉二袋、突飛ばした時に着いたのだ

ろっぴヨモンの羽、靴　これだけのものとピヨモンの能力、自分の運動神経、黄色い亀のリーチ、体格、から逃げる策を考えなければならぬ

一番良いのは走って振りきることだ　しかしそれは無理だろう、一步の大きさに差がありすぎる。

間合いを広げながら

黄色い亀は縮めようとしてくる

亀だが首は長い、甲羅には入らないだろう　足は短く、しかし走るには十分なものだ。

何とか3メートルまで広げたところで　黄色い亀が動いた

猛然とがった口を大きく開けよだれを撒き散らしながら突っ込んでくる

「があああああああああああ」

三步、それが三メートルの距離を埋めるのに黄色い亀が要した歩数　しかし、直線的な突撃は避けられないものではない。

ピヨモンは左に　私は右に避けた　が左の前足の爪が手に持った睡眠薬の粉二袋を破き辺りに撒き散らした　亀はその場で急ブレーキ　しかし結果多少動きが止まる　無論、睡眠薬で眠るわけはない　しかし、それが破れたのは計算通りだった。　「ピヨモン!!!」　正しく意図を読み取ったピヨモンは「マジカルファイヤー!!!」

皆さんは粉塵爆発といった現象をご存知だろうか、粉塵爆発は空気中に一定濃度の粉塵が舞うことにより非常に発火しやすくなる現象である。さて、睡眠薬二袋といつても自殺するために大量に手に取れたものの一部で300グラムはある

つまり、だ。

黄色い亀の眼前で超連鎖的に睡眠薬の粉に発火する反応が繰り返され　平たく言えば　目を潰すには十分な爆発が起きた。

翔には確信があつた、この程度でアレは死なないだろうと。だから肉の削がれた右腕で、素早くピヨモンの手（羽？）を掴み走り出した。

確かに翔の目論みは成功した、目はつぶれ、耳もまともには聞こえないだろう、しかし嗅覚は一切のダメージを受けてはいなかった。

そして亀の嗅覚はシヨウとピヨモンの位置をしっかりと捕捉し

突撃した。

「ああああああああああがああああああああああああああああああああああああああああああああ
あああああああああああああああああああああああああああああああ」

そして後1メートルもなくなった時　「フム　こんなもんかう。」

そして

「ハング・オン・デス!!」
刹那

黄色い亀の体が空間ごと捻り潰され、夥しい量の血と臓腑が

ビチャッ

地面に染み込んでいった　しかし　数秒後には　光の粒子となり、高く上がっていった。

翔とピヨモンが見たのは高だかと杖を掲げたジジモンだった。

「ジジモン……」

あっさりと命を奪ったジジモンの第一声は

「70点といったところか」

……はい？

「翔は無理しすぎ、ピヨモンは考えなさすぎじゃな。」

確かにそうだ、今見るとピヨモンの細かい傷はもう消えかけた。デジタルモンスター　怪物とつくだけあって回復力もすごいのだろう　しかし、あの姿が変わった《進化》とはなんなのだろう、まずピヨコモンがもともとからピヨモンなれたのならなぜなっていないのか

そこで私の意識は、消失した。

起きた時、目の前には心配そうなピヨモンがいた。
辺りを見渡すとどこかの家のようだ。

「ここはジジモンの家だよ。」

なるほど、だとすれば安全だろうか。

そうこうしているとジジモンが 「やっと起きたか、お前は2
日間寝ていた。」

「オレの的確な治療の成果で腕はもとどりにしたのじゃ。」

「翔、お前はピヨモンを信頼するのじゃ、説明の途中でトータモン
あの亀が割り込んできたから知らんじやろうがパートナーはテ
イマー パートナーを持つ人間のことだが、そのテイマーとの
信頼関係が力になる、ここはデジタルワールド、強い心は実体を伴
ったデータになる」

「・・・はい。」つまり旅に出るといったのも、情報収集と信頼関
係の確立が目的か。

「デジモンは進化することで強くなる。幼年期、幼年期 ピヨ
コモンのレベルじゃ、成長期、ピヨモンなんかがそう、成熟
期 トータモン、完全体、究極体、オレじゃな。」なるほ
どこれでトータモンを一蹴したのも納得だ。「ちなみにピヨコモン
がピヨモンに進化したのは信頼関係とまでは行かないが、ある程度

お互いが好意的になつたからじゃ」「

あのトータモンは死んだのだろう。」

「じゃあ、とつとと旅に行かんか。」

・・・え？

「ジジモンはぼくらと一緒にこないの？」

「行くわけないだろう。」

「・・・しかし最初の目的地ぐらいは決めてやるつ、始まりの町を
目指せ。そこにいるデジモンを訪ねるといい。」

・・・いやあんさんそれどこよ？場所言えよ。

「どっち？」ピヨモンは本当に私と同じようなことを考えているみ
たいだ、彼（？）の中に私のデータがあるからだろうか。

「北に見える山のふもとじゃ」「

私は考えていたことがある、前回の説明の時に一部のデジモンがパ
ートナーを持つとっていた　　つまり

「私の他に人間はデジタルワールドにいないのか？」

「わからんな、仮にいたとしても、味方が敵かは別問題ではないか
な。」

なるほどジジモンは私の他には呼んでいないのか、そしてわからな

いということは 他にも呼べるデジモンがいるのかもしれない。

「ピヨモン、行ってみようか、少しやる気出てきた。」

0と1の狭間 私が呼ばれたこと ジジモンが私のことを
知らなかったこと

これらから導き出される答えは

もしかしたら《彼》もいるかもしれない 殺してしまった彼も

「うん！行くうー！ショウウー！」

第3話 奇策と力 (後書き)

ジジモンがすっかり説明キャラに・・・もう出番はなさげかな・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4572ba/>

atonement

2012年1月14日10時45分発行